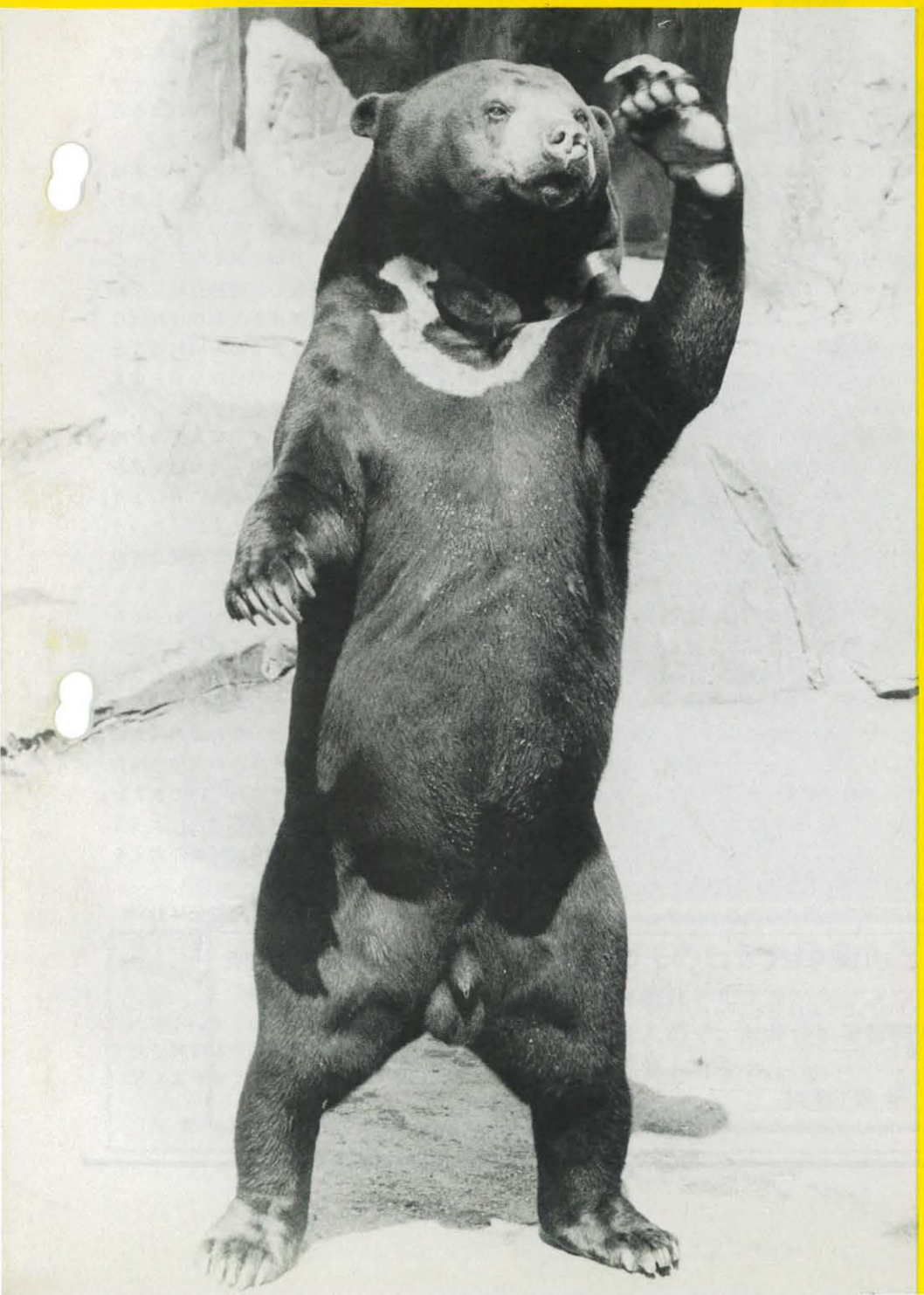
なきごえ



1980

11

大　阪　市
天王寺動物園協会

動物と私

杉山　衛

京都の北部、福知山に生まれ育った私は、物心つく頃から大の動物好きでした。

子供の頃から暇さえあれば、近くの山野を、草花や動物を求めて歩き廻ったものです。また1日中、草花や動物に囲まれて過ごしたかった私は、鳥を始めネズミ・ヘビ・カエル・魚・昆虫、何でも飼育した事を覚えています。

私の夢は将来、動物園の飼育係になることでしたが、願いは実らず、電々公社に就職しました。社会に出て、働くようになってから、特に鳥に興味を持つようになり、現在も続いています。

最近では、私達の住む田舎でさえも、鳥類を始め他の動物も、ほとんど観察することができません。自然の動物達と接する機会を無くした子供達は、大変かわいそうであり、大人達の中には、いろんな動物がいた昔が懐かしく思われる方がいらっしゃるのではないでしょうか。

自然の動物が私達の周辺に戻って来るようになるには、先ず自然の大切さ、心要さを知らなければなりません。私が今、鳥を飼育し繁殖することが少しでも多くの人々に、動物と接するすばらしさを知って頂き、自然の大切さを自覚して頂くようになったとしたら幸いです。

現在野生動物に対して、人々が取り決めている法律や条例、また彼らに対して行なっている行動は、大変彼らを苦しめている場合がないとはいえません。

①鉄鉋で撃ち殺してもいいが、飼って増やしてはいけないキジ

②1羽の鳥を飼うためにつかまえてはいけないが、農薬によって大量に殺しても罰せられない法律

③「現在何羽確認できた」とか、表に現われる鳥が何羽確認できたか気になる一方では、鳥の棲息地を開発という名で破壊しても、とがめることのできない法律

④例えば、現在ほとんど減ってしまい姿を見ることができなくなった月ノ輪グマを、偶然見つけて「熊が出た」と言って追い廻し撃ち殺し、さもりっぱな事をしたかのごとく載せる新聞社。いずれクマは絶滅するのは目に見えていると思われます。絶滅してから何年かすると、今度は日本狼の場合のように、見たとか見ないとか、大さわぎをすることになるでしょう。それでは遅いのです。アメリカのピューマのように例え害獣であったとしても、手遅れにならないうちに厳重に保護しなければなりません。

⑤スズメが米を食べるので害鳥と言いますが、実は繁殖期には野菜に付く虫を大量に食べる益鳥と言われます。秋の僅かな時期、米を食べるのを見つけて害鳥扱いはかわいそうです。野菜に付く虫を目先だけの結果にとらわれて農薬を使い、野鳥を殺した結果として毎年大変な努力と農薬代を使わなければなりません。また農薬の健康に与える害も忘れることはできません。以上思い付きまた気になる事を書きましたが他にも例は沢山あると思われます。

害虫・害鳥・害獣とは言ってもそれは人間の立場からの見方であって、人間が彼等の生活の場を踏みにじって勝手に入り込んだ結果にすぎないでしょう。彼らの立場から見れば人間は“人間的文明”という武器を持った不法侵入者としか見えず、大変な害獣に写ると思います。

彼ら動物達が住めない自然環境は人間にとっても不向きなはずです。現在鳥や獣が身近に見ることのできない人々にとっては、自然がいかにすばらしく、大切であるかを知る機会さえ少ないと思います。そこで私にできるただ1つのことは、現在輸入さえ難かしくなった野生鳥類をできるだけ良い環境で飼育し、彼女達を繁殖し維持していくことしかできません。そしてその姿を身近に観察されることによって自然環境の大切さを知って頂き、自然保護の考えを持っていただければ幸いです。

（日本電信電話公社勤務）

なきごえ11月号もくじ

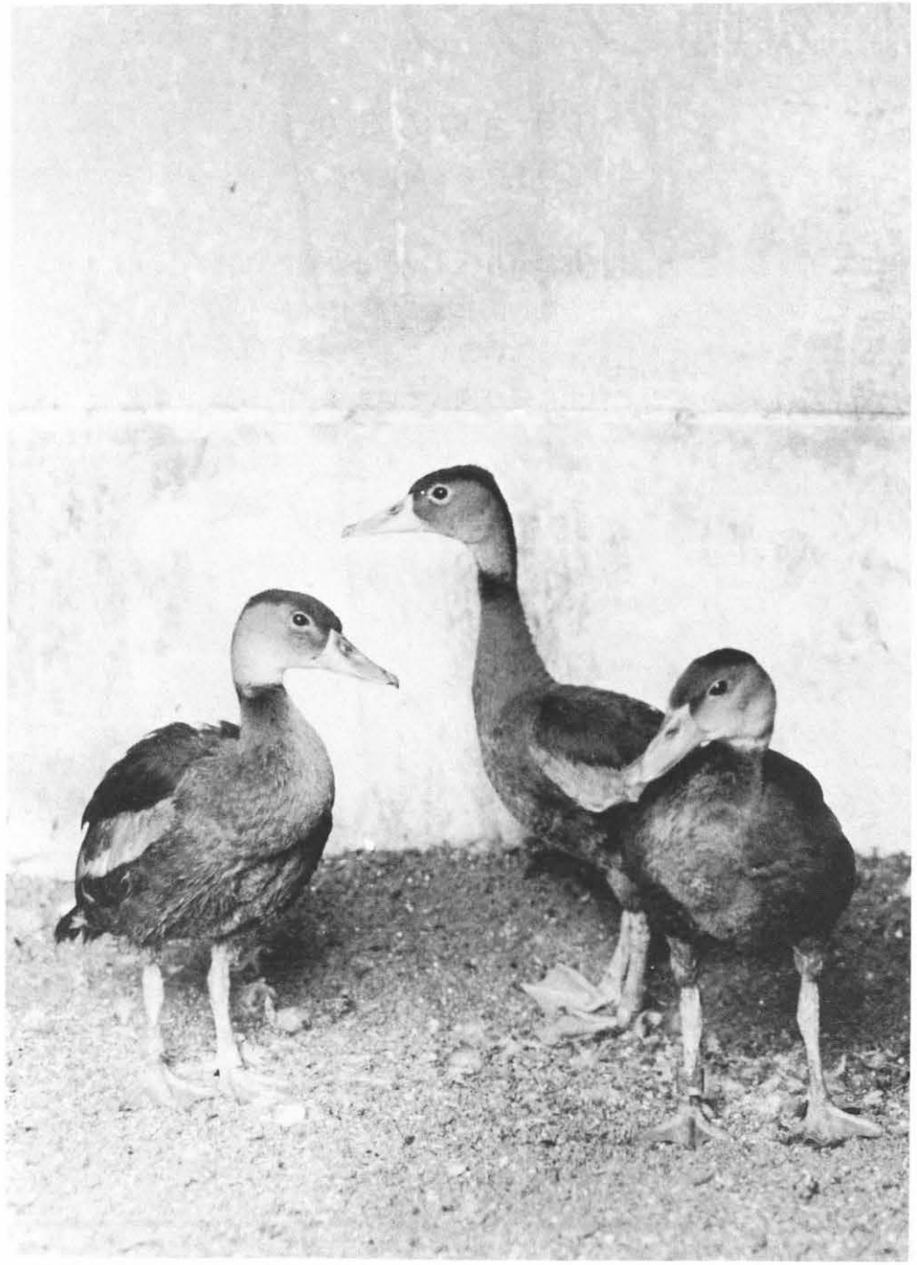
動物と私 …… 2
“アカハシリュウキュウガモのヒナお目見え” …… 3
動物園グラフ・動物園日記 …… 4・5
東アフリカ紀行（Ⅱ） …… 6・7
パカの飼育と繁殖 …… 8
北米通信員だより ② …… 9
獣医室から ㉗ …… 10
動物園ニュース …… 11

表紙の写真説明

“マレーグマ”

東南アジアに分布する木登りのうまい小形のクマです。動作は愉快で、動物園でも後肢で立ちあがって入園者に愛嬌をふりまく姿がよく見られます。

（撮影：野口　秀高）



“アカハシリュウキュウガモのヒナお目見え”

7月29日、8月30日、9月1日に孵化したアカハシリュウキュウガモは、こんなに大きくなりましたので、放養舎にお目見えしました。これは日本で最初の繁殖と思われます。

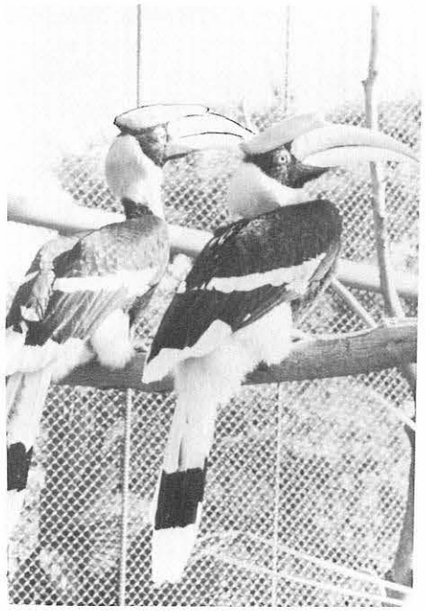
（撮影：榊原　安昭）

動物園グラフ

“サイチョウのなかま”

サイチョウとは、くちばしの上にある角質の飾りがサイの角に似ているところからつけられたものです。

サイチョウのなかまは、45種あり、インドから東南アジアにかけての森林にすんでいます。現在、天王寺動物園には5種のサイチョウが飼われています。これは、日本の動物園でも一番多いコレクションです。2年前に新設された大きな小鳥の家のケージで自由に飛び回っています。　（撮影：樽本　勲）



★オオサイチョウ
その名の通りサイチョウのなかまでは一番大きく頭の上の黄色のヘルメットと巨大な嘴が特徴です。
雑食性でネズミや卵・果実・パンなどをいったん空中にほりあげて食べます。2番4羽がにぎやかにいる風景は見事です。

★ムジサイチョウ
羽毛が黒色の地味なサイチョウで嘴の色やコブも黒い。よくなついていて、飼育係が行くと寄ってきて餌をねだったりします。

★カササギサイチョウ
よく飛び回っている愛くるしい小形のサイチョウです。嘴の上方には大きなバナナ状のコブがあります。

★サイチョウ
オオサイチョウよりはやや小型ですが、赤くそり上がったヘルメットがとくちょうです。最近入園した若い1羽は、まだそり上がっていませんが、年と共に写真のようになることでしょう。

★シワコブサイチョウ
のどのところに紫色の袋状のひだが特色で、ヘルメットは薄いが、多くのシワ状になっているのでこの名がある。

9・10月の動物園日記

9／23. 動物慰霊祭が、北園慰霊碑前で行われました。
25. 骨折したピューマの仔の再手術をしました。
27. オナガキジ、コサンケイ、ミヤマハッカン、ギンケイの寄贈がありました。
28. フサホロホロチョウが出血性腸炎のため死亡しました。
29. タンチョウの雛が元気をなくしたので投薬しました。

10／1. 冬仕度のためニホンザルの仔が、ボイラー火入れ式の火入れをしました。
2. 先日から跛行しているダマシカのレントゲン撮影をしました。
キタキツネが尾端を咬まれたので治療しました。
6. タンチョウの雛の治療を続けています。
7. アカカンガルーが足を化膿させているので治療しました。
9. ゴリラのラリが口内炎になったので治療を始めました。
10. セイランが入園しました。
12. 秋の動物園祭が始まりました。
アカカンガルーの治療を続けています。
17. マレージャコウネコが難産のため子宮内膜炎となり死亡しました。
バーバリーシープの雌3頭が出園しました。
阿倍野警察よりアライグマの保護預りがありました。
18. 昨年入園したオシドリの雌が肝腫瘍のため死亡しました。
18. ペンギン17羽が、冷房室から屋外展示場に移動しました。
19. 雨のため動物園祭を中止しました。
バーバリーシープのボスが若雄との闘争のため角を折りました。
20. 昨年来、闘争防止のため別居していたライオンの雄2頭を同居させました。
22. メンヨウの雌1頭が出園しました。
23. 今年6月14日に生まれたブラックバックが闘争のため死亡しました。

東アフリカ紀行（Ⅱ）

§ボゴリア湖

8月11日は、目的地が遠いため朝7時20分にマサイ・マラ保護区のフィグ・ツリーキャンプを出発しました。途中サファリを続けながら約300km北のボゴリア湖へと向いました。一言に300kmといっても、その80%は未舗装の悪路の連続、そこをどんどんとばすのですからすさまじいものでした。ナロックで給油をかねて30分ほど休憩した後、さらに北へ向かいました。左右に広がる平原には、ほとんど野生動物は見られず、ほとんどがフェンスに囲まれたトウモロコシや小麦の畑と牧場ばかりでした。野生の王国ケニアといえども国立公園や保護区を出ると野生の動物を見かけることはほとんどありませんでした。それでも小さな池にアフリカオオバンの群を見つけたり、牧場のフェンスに羽根を休めているエボシクマタカを見つけることができました。

ナロックを出てからほとんど休息もせず走り続けて正午も過ぎても、まだボゴリア湖らしい風景は見えません。付近はサイザル麻を取る大規模な農場が広がっていました。農場がなくなったあたりからは赤土の道路を土ぼこりをあげながら走り続けました。途中は小さな集落が時々見えるだけで、動物も全く出てこない単調なドライブに、ほんとうにフラミンゴが見れるのだろうか不安になってきました。

行く手の谷間いに湖を認めたのはもう3時近くになっていました。ところがゲートでの手続に手間取り、しばらくの間待たなければなりませんでした。事情の解らない私たちはちょっと不安になってきました。やっと手続も終り湖の方へ降りてゆき、フラミンゴにあふれる湖面が見えた時の感激は簡単には表現できるものではありませんでした。車の走るのもかまわずカメラのシャッターを切り続けました。

桜の花びらのようなフラミンゴの群

遠くからながめる風景はまるで桜の花びらを水面に浮かべたように美しいものでした。その感激に朝から走り続けてきた疲れも空腹もふっとんでしまいました。湖岸まで車で降りて行ったのですが、その道のすごいこと大きな石がゴロゴロころがった斜面を登ったり、降りたりするのですから、その振動のすさまじさにはいささか閉口しました。

ボゴリア湖は、バリンゴ湖とナクル湖の中間に位置し、南北約20kmほどの細長い湖です。ナクル湖は数百万のフラミンゴが集まるので有名だったのですが、現在は湖岸のケニアでも大きな都市の1つであるナクルの町の工場廃水などのため環境が破壊され、ほとんどこのボゴリア湖に移動してしまいました。2年前のケニアの旅行ではナクル湖を訪れたのですが、その時もあまり多くのフラミンゴを見ることはできませんでした。ボゴリア湖はまだあまり知られておらず、また交通の便も悪いためあまり多くの観光客も訪れておらず、たいへん静かなよい所でした。その日も我々以外に訪れるグループはなかったようです。このことはフラミンゴたちにとってはよいのではないでしょうか。

西岸に車を止め、昼食を取ることになったのはもう午前3時30分近くになっていました。木影での昼食もそこそこに、写真を撮ることにしました。フラミンゴはあまり人を恐れることもなくかなり近寄ることができました。

湖岸をうずめるフラミンゴ

アフリカに分布するフラミンゴは、広くヨーロッパや南アメリカに分布するベニイロフラミンゴとコガタフラミンゴですが、この湖のフラミンゴはすべてコガタフラミンゴでした。そのフラミンゴが集団となって岸辺から10mぐらいの帯状になって餌を食べているのですから、その数は想像もつきません。また遠目にはペリカンのように見えた湖の中心にまばらに浮かんでいる鳥たちも、双眼鏡でよく見るとこれもすべてフラミンゴでした。フラミンゴの水掻きも泳ぐことに役立つのだなあと、今さらながら感心しました。またフラミンゴの群の中には、頭部の黒っぽい幼鳥もかなり混っていました。この湖で繁殖しているらしく、来る途中空の巣ばかりのコロニーが多くありました。

採餌中のフラミンゴ

フラミンゴ以外にもホオジロカンムリヅルやアフリカクロトキなども餌をついばんでいましたし、シギやチドリの仲間も多くいたのですが、次の宿泊地へ向かうため、わずか30分ほどで出発しなければなりませんでした。もう少しいたかったのですが、そういうわけにもいかず、しかたなく出発することになりました。ほんとうにわずかの時間でしたが、絵のように美しいフラミンゴの群に満足しボゴリア湖をあとにしました。

ゲートを出て少し走ったところでは、アヌビスヒヒやサバンナモンキーの群に出会いました。またディクディクが自動車の前をさっと横切るのを一瞬見ることができたのは幸運でした。その後ナクルの町で給油したのち、今夜の宿泊地ナイバシャへ向かいました。しかしまだかなり距離があり、到着したのはもう暗くなった午後7時になろうとしていました。その夜の宿のナイバシャ・サファリランド・ロッジは、ナイバシャ湖岸にあり、真暗な湖面からは多くの鳥たちの声が聞えてき、明日は早く起きて鳥たちを見ることを楽しみに眠りにつきました。

§ ナイバシャ湖

翌8月12日は、まだみんなが寝ている6時半に望遠レンズをかついで湖へ出かけました。湖岸には多くのヨットやボートが停泊していましたが、それでも多くの水鳥たちが群れていました。オニアオサギやアフリカオオバンの写真を撮っていると、突然あたりが騒がしくなったので何が起ったのかと空を見上げますと、なんとサンショクウミワシがこちらの方へ飛んで来るではありませんか。サンショクウミワシはふわりと湖面に立つ木の上にとまりました。

オニアオサギ

サンショクウミワシ

サンショクウミワシは、ウミワシの中では最小ですが、頭から胸にかけては白色で翼は赤褐色の美しいワシです。一日中お気に入りのとまり木にとまり、餌物をねらっているとのことですが、一度も餌物を取るために飛び立つこともなく、いつのまにかどこかへ飛んで行ってしまいました。その他にハダダトキやアフリカクロトキが湖にやってきたり、湖面にはモモイロペリカンやアフリカオオバンが浮んでおり、カモ類もキバシガモやアカハシオナガガモなどたくさんの鳥がいました。朝食後の出発までのわずかな時間にも、ロッジ近くにはクロオーチュウやタイヨウチョウなどの多くの小鳥たちもいるすばらし

クロオーチュウ

い場所でした。もう一泊ぐらいここでしたかったのですが、そういうわけにもいかず、ナイロビからアンボセリへ出発することになりました。

しかし、鳥好きの私にとってこの2つの湖を訪れることができたのはすばらしいことでした。

（つづく）

（飼育課：榊原　安昭）

パカの繁殖

その飼育ノートから

はじめに

パカ *Cuniclus paca* は、中南米に生息する大型の齧歯類の仲間で、チョコレート色の体に白い斑点がある美しい動物です。このパカは日本の動物園での飼育例も少なく、繁殖例の報告も全くありませんでしたが、今年の7月に当園で飼育しているパカが、1頭の仔を出産し、その後の仔の成長も順調にいっています。パカの繁殖は日本では初めての事ですので、今回はこのパカの繁殖の経過を紹介したいと思います。

☆意外に気の強い動物

パカは齧歯目パカ科に属する動物で、ヤマアラシやテンジクネズミ(家畜化されたものがモルモット)などに近い種類です。初めてパカが入園したのは1972年の12月で、2頭のパカが入園しました。その後1頭は死亡しましたが、1979年の7月に、繁殖を願うために1頭の雌を入れました。最初からいる雄と同居させるために、雌を小さなケージに入れ、見合いをさせていざ同居という時点で、意外にもパカの気の強さに驚かされる事になりました。同居させて数日後に、雌が雄に背中を咬まれて大ケガをしてしまいました。すぐに雌を動物病院で手術をし、そのまま入院という事になり、同居の試みは失敗に終りました。やがて雌のケガも良くなり、10月に2回目の見合いをさせ、やっとの事で同居に成功しました。

☆繁殖経過

パカの繁殖例は先にも書いたようにあまりなく、又、野生での行動や繁殖の記録もあまりありません。野生では、2月と5月の2回、1頭か2頭の仔を出産し、2ヶ月から3ヶ月間程ほ乳が続くということです。今回繁殖に成功しな経過を観察記録から抜粋して記すことにします。

なお、文中のペットネームは、雌がパーコ、雄がダメオです。

○1980年3月15日

ダメオがパーコに向ってさかんにマウントしようとパーコを追いかける。

○4月7日

ダメオが、パーコに尿を断続的にかけている。この性行動は齧歯目のヤマアラシや、ウサギ目のウサギなどにみられる求愛行動と同じだ。

○5月1日

パーコの乳頭がピンク色になり、少し張ってきたようだ。体をなでてやると気持よさそうに横になって寝ころぶ。パカの乳頭は2対で、胸のところに1対と下腹部のところに1対ある。胸に乳頭がある点は、近い種類のアグーチと同じだ。

○5月11日

近頃のパーコは寝室から運動場に出す時に、表に出るのをいやがり、ワッワッと不安そうなうなりごえを出すようになる。もしかして妊娠しているのではと淡い期待感がこみあがってくる。

○7月25日

運動場の箱の中に仔を1頭発見す！　PM5:00すぎ、仔はもうすでに眼も開いていて、ヨチヨチと歩いてもいる。まるで親のミニチュアのようで、とても可愛い。母親のパーコは落ち着いており、ほ乳も確認、念のためダメオと母子は分けておく。

○7月26日

仔の体長は15㎝位、元気である。名をムーミンと名付ける。すでに固形食も口にしている。性別は不明である。

○7月31日

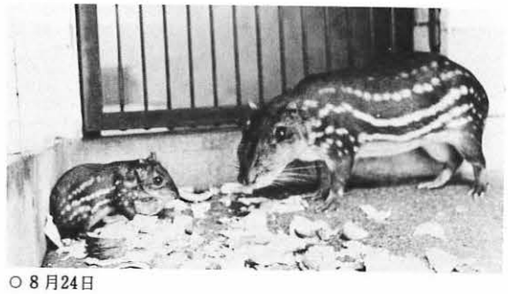
パカの哺乳姿勢には2通りあるようだ。母親が横になって寝ころんだ状態で哺乳する方法と、座った状態で哺乳させる方法である。前者の場合ムーミンは胸部と腹部の乳房の両方を吸っているが、後者の場合は、胸部の乳房だけである。

○8月3日

母子と雄のダメオを同居させる。ダメオはムーミンに対して関心があるようで、ムーミンのおしりのあたりをしきりにかいだり、なめたりする。ムーミンの方も、大きなダメオが気に入ったらしく、ダメオの後について歩くようになる。

○8月11日

パカに与えているパン・リンゴ・サツマイモ・ニンジン・キャベツ・青菜等を、ムーミンは前肢に持って食べている。この採食方法は、アグーチと同じであり、成獣のパカはこのような食べ方はしない。



○8月24日

元気いっぱいのムーミンは、時おりウサギがジャンプしたり、スキップするような行動をし、親では見られない敏しょうな動作を見せる。

○9月1日

ムーミンの採食方法が親の食べ方と同じようになり、前のように前肢で餌を持つ事がなくなる。

○9月9日

母親の半分位にまで成長したムーミンだが、哺乳はまだ行われている。

○9月18日

ムーミンが、母親のパーコにマウントをしかけた。

(飼育課：農本　武志)

パカの仔の計測値

	体長(cm)	頭長(cm)	体高(cm)
7月26日	15	5	7
7月31日	18	5	8
8月24日	28	8.5	12
9月9日	38	10	16
9月25日	42	11.5	18

北米通信員だより ②

西海岸で最後に訪れたのは世界一の種数を誇るサンディエゴ動物園でした。ここでは子供動物園に限り報告したいと思います。子供動物園は園内のすみにあり、別料金です。まず入ると動物の大きさを知るための実物大の動物型ともの・さ・しが目につきます。なおも行くと、ウサギやモルモットを抱かせるコーナー、ヤギに触れエサをやるコーナー、卵について

教えるコーナーなど次から次へといろいろな施設があらわれます。小鳥の家は無数にあり、角を曲がると仔象がいたり、カワウソの泳いでいるのが水面下から見られたりして、これだけでも独立した動物園が成立するほど盛りだくさんで、園全体をまわりきった後で行ったので、職員の人とは2、3質問しただけで満足な1日を終えました。

次に訪問したのはジョージア州のアトランタ市立動物園ですが、短時間、かつ教育担当者不在（休暇中）のため表面上とらえられた内容を報告したいと思います。まずアトランタでは8月19日の午前、市の中心からバスに乗って約20分、郊外の住宅地の一角にあるZOOを訪れました。前もって連絡しておいたので簡単にDobbs園長にお目にかかることができました。園長は自ら案内を買って下さって、20エーカーの園内を見せて下さいました。予備知識としては、この動物園はもともと市の規模の割にはそう大きなものではありませんでしたが、1965年、当時全米で最年少のDobbs氏（現園長）が爬虫類のCuratorとなられてからの爬虫類コレクションの充実ぶりはめざましく、500種類というのはちょっと他に例がないと見聞きしていました。なるほど、チーターが見られ、オランウータンこそ繁殖しているものの、見

サイエンスルームのカメに触れるコーナー（アトランタ）

られるのはごく普通の清潔な動物園の姿でした。旧館内に教室の設備があり、市の教育委員会の主催で小学生から高校生までを対象にさまざまな講演や実習が、カリキュラムの一環として行なわれているということで、教室の一隅には、子供が小動物をさわることのできるような設備もあり、危険なものは剝製で代用しているとのことでした。他に、子供動物園もありましたが、ここは単に家畜を展示しているだけのようでした。園長のお話では、あと、移動動物園があるとのことで、ボランティアも20人ばかりいるが多くは主婦で、園内のガイドが主な仕事だということでした。

さて、隣の爬虫類館に入って規模の大きさに目を見はりました。なるほど、これだけの施設は西海岸でも見たことはありませんでしたし、動物園全体の質の向上のためにも必要だったとの氏の御言葉の意味がよくわかる気がしました。ここからはキーパーのBenedict氏が案内して下さいました。「爬虫類コレクション充実の背景は？」と尋ねると「米国南部が温暖な気候のために、爬虫類、両生類の宝庫だからという答えが返ってきました。単に種類を揃えているばかりでなく、繁殖にも力を入れており、全米で先がけて成功した種も少なくないようでした。日本産のオオサンショウウオも中国産のものの隣の水槽にいて目下繁殖を研究中とのことでした。

（つづく）

（大阪動物園ボランティアズ会員：富樫史朗）

獣医室から ㉗

ライオンの骨折――その驚くべき回復力――

＊＊＊＊一年間の闘病生活から＊＊＊＊

昨年11月12日、ライオン放飼場にいるオスライオンのタケオ（当時８才）が、うずくまって元気をなくしているのが発見されました。夕方、寝室へ戻る時の状態も左後足を地面につけず、かなり痛々しそうでした。骨折の疑いが濃厚で、翌日、早速診察することにしました。といっても体重150kgをこえるライオンだけに、動物病院へ運んで診察することはかなり危険なため、ライオン舎寝室の一室を臨時診療室にしました。麻酔ピストルで麻酔薬を注射し、よく麻酔が効いた後、レントゲン撮影をしました。その結果、左下腿骨の複雑骨折と分りました。どうやらタケシの弟ライオンのテツとの闘争が原因のようです。手術は患部を切開後、骨折した骨髄の中に直径５mmのステンレスピンを入れて骨折部を修復補強し、又、遊離した骨片はステンレスワイヤーで結紮しました。しかし手術そのものも難手術でしたが、体が重いだけに足の向き一つ変えるのも大仕事で、数人で引っぱったり押したり……とにかく私自身も初めて経験する長時間を要する大手術となりました。朝10時半に開始して昼食ぬきで続行し、手術の終了は午後３時半と５時間にも及んだのでした。寒さの中で腰をかがめての手術だけに、たずさわった獣医陣もしばし腰が伸びませんでした。

入念にした手術でしたが、ライオンの重量と力の強さの前には固定用のギプスもひとたまりもなく、10日目、20日目、40日目に再、再々、再々々手術を行いました。抗生物質、ビタミン剤、カルシウム剤、ホルモン剤等の連日の投与にもかかわらず、タケオの容態に目立った進展はなく、３ヶ月を経ても患肢での負重は認められず、寝室で横たわる日々でした。へたをすると一生足の不自由な体になるのではという焦りに似た気持もおき、我々獣医も担当の係員も万一の場合を考えると暗いムードでした。しかし手術も投薬もできる限りのことはした以上、後はタケオの回復力に頼るしかありません。骨折後５ヶ月を経た頃から患肢をかばうことなく動けるようになってきました。しかし狭い寝室の中では足の動きが少いだけによく分りません。さらに辛抱すること２ヶ月、６月20日の朝、タケオを７ヶ月ぶりに放飼場に出しました。久しぶりの外の空気、陽光、土の嗅い……全てなつかしかったことでしょう。骨折した患肢をわずかにかばうような歩き方でしたが、しっかりと歩きました。とても完治不能と思われたあの複雑骨折が治ったのです。我々もこの治癒したことがふしぎでした。あの薬がよかったのか、あの固定法がよかったのか……今となってはどれも成功の原因に思われます。しかし動物の生命力、回復力のすごさにはすばらしいものがあります。時にはへたにいぢくりまわす医療技術など不要の場合もあるでしょう。今回のタケオの場合、我々の医療技術だけではとても治らなかったと思います。驚嘆すべき回復力があったなればこそでしょう。治療ということは科学的な治療ばかりでなく、生命のもつ回復力をいかに利用するかということも大切なことであると痛感しました。

丁度１年を経た現在、タケオは何の不自由もなく走れますし、弟のテツを制して再び放飼場の群のボスにかえりざきました。

（飼育課：宮　下　　実）

動物園ニュース

§寄贈動物

９月27日、キジ類の寄贈がありました。寄贈下さったのは奈良市在住の上村画伯で、同画伯はキジ類のコレクターとしては全国的に有名な方です。以前から何度も御寄贈いただいているのですが、今回はオナガキジ、オス１羽、コサンケイ、メス１羽、ミヤマハッカン、メス１羽、ギンケイ、１番の計５羽で、以前からペアリングの為に入手先を探していたものばかりです。５羽は検疫の上、各キジ舎で同居させました。

§ボイラー火入れ

寒さに弱い動物達が寒い冬の間暖かく過せるように、毎年10月初めから翌年の５月中旬までスティーム暖房で各動物舎を暖めていますが、このボイラーの火入れ式が10月１日行われました。

今年の火入れ式には

輝く鉄の柵に春子やユリ子は初め少し戸惑い気味でしたがすぐ慣れました。これで、もし事故があってもスムースにゾウを運動場に戻せると思います。

§ペンギン移動

秋が来、ペンギン達の大好きな冬ももう目の前です。そこで10月18日、イワトビ、マカロニ、キング、マゼランの各ペンギン計13羽を室内プールから屋外運動場に出してあげました。５ケ月振りに屋外へ出たペンギン達は久し振りに外気を胸一杯吸い込んで

くらしを彩るショッピング

近鉄百貨店

アベノ店 (06)624-1111・上本町店 (06)779-1231
東京近鉄 (0422)21-3331

・近鉄百貨店グループ
大阪(アベノ・上本町)・東大阪・奈良・京都・岐阜
枚方・四日市・和歌山・徳山・別府・東京(吉祥寺)

獣医室から ㉗

ライオンの骨折――その驚くべき回復力――

＊＊＊＊一年間の闘病生活から＊＊＊＊

昨年11月12日、ライオン放飼場にいるオスライオンのタケオ（当時８才）が、うずくまって元気をなくしているのが発見されました。夕方、寝室へ戻る時の状態も左後足を地面につけず、かなり痛々しそうでした。骨折の疑いが濃厚で、翌日、早速診察することにしました。といっても体重150kgをこえるライオンだけに、動物病院へ運んで診察することはかなり危険なため、ライオン舎寝室の一室を臨時診療室にしました。麻酔ピストルで麻酔薬を注射し、よく麻酔が効いた後、レントゲン撮影をしました。その結果、左下腿骨の複雑骨折と分りました。どうやらタケシの弟ライオンのテツとの闘争が原因のようです。手術は患部を切開後、骨折し

へたをすると一生足の不自由な体になるのではという焦りに似た気持もおき、我々獣医も担当の係員も万一の場合を考えると暗いムードでした。しかし手術も投薬もできる限りのことはした以上、後はタケオの回復力に頼るしかありません。骨折後５ヶ月を経た頃から患肢をかばうことなく動けるようになってきました。しかし狭い寝室の中では足の動きが少いだけによく分りません。さらに辛抱すること２ヶ月、６月20日の朝、タケオを７ヶ月ぶりに放飼場に出しました。久しぶりの外の空気、陽光、土の嗅い……全てなつかしかったことでしょう。骨折した患肢をわずかにかばうような歩き方でしたが、しっかりと歩きました。とても完治不能と

遊園施設委託経営・製作・販売

久竹娯楽株式会社

本社 工場　大阪市西区北堀江1丁目23番21号

電話 大阪(06)541―3112・3938番

動物園ニュース

§寄贈動物

９月27日、キジ類の寄贈がありました。寄贈下さったのは奈良市在住の上村画伯で、同画伯はキジ類のコレクターとしては全国的に有名な方です。以前から何度も御寄贈いただいているのですが、今回はオナガキジ、オス１羽、コサンケイ、メス１羽、ミヤマハッカン、メス１羽、ギンケイ、１番の計５羽で、以前からペアリングの為に入手先を探していたものばかりです。５羽は検疫の上、各キジ舎で同居させました。

§ボイラー火入れ

寒さに弱い動物達が寒い冬の間暖かく過せるように、毎年10月初めから翌年の５月中旬までスティーム暖房で各動物舎を暖めていますが、このボイラーの火入れ式が10月１日行われました。

今年の火入れ式には人工哺育中のニホンザルの「ユーミ」チャンが特別出演、長い点火棒にすがりつくようにして火入れしてくれました。来年の５月まで19万２千リットルの重油を使う予定です。

§新キジ舎入居

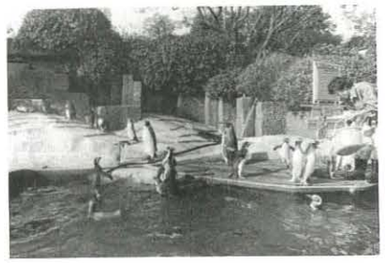
先月号でお知らせしましたように動物病院建設に伴い取り壊わされた旧キジ舎に代って新キジ舎が完成しましたが、10月２日、旧キジ舎の住人達が新キジ舎に入居しました。入居したのはワシミミズク５羽、ベンガルワシミミズク１羽、それにフクロウ３羽、オオコノハズク３羽、アオバズク１羽、コミミズク１羽、それにチャムネシャクケイ２羽などです。仮の収容舎に長く飼われていた鳥達は久し振りに広い明るい動物舎に移され、のびのびした感じです。

§象舎スロープ

南園の象舎には観客とゾウとの間に深い空濠が設けられていますが以前から時々春子やユリ子がここに落ち、運動場へ戻すのに一苦労していました。そこでこんな苦労を無くす為、運動場の東端に空濠から運動場にあがるスロープを設置しました。銀色に輝く鉄の柵に春子やユリ子は初め少し戸惑い気味でしたがすぐ慣れました。これで、もし事故があってもスムースにゾウを運動場に戻せると思います。

§ペンギン移動

秋が来、ペンギン達の大好きな冬ももう目の前です。そこで10月18日、イワトビ、マカロニ、キング、マゼランの各ペンギン計13羽を室内プールから屋外運動場に出してあげました。５ケ月振りに屋外へ出たペンギン達は久し振りに外気を胸一杯吸い込んで、とても楽しそうでした。



§秋の動物園まつり

さる10月12日から11月３日まで「秋の動物園まつり」が開催されました。期間中の日曜・祝日には動物無料相談コーナー、遊戯、人形劇、ボランティアによる動物ガイド、ラッキープレゼントなどの催物が行われました。また、北園展示館では、「児童動物面入選作品展」を開催しました。

同時に、この期間中、入園者に対し「ゴミのないきれいな動物園づくり」の協力を呼びかける「動物園クリーンキャンペーン」を実施しました。

☆　お詫び

先月号の５ページ、「動物園グラフ」のオグロワラビーの項で、東アフリカとあるのは東オーストラリアの間違いです。お詫びして訂正します。

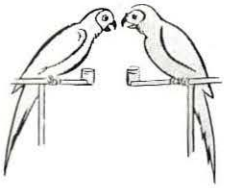
＊休園日のお知らせ＊

毎月第３月曜日は休園日です。来年２月までの休園日は下記の通りです。

11月17日(月)、12月15日(月)、年末年始は12月29～１月１日、１月19日(月)、２月16日(月)、

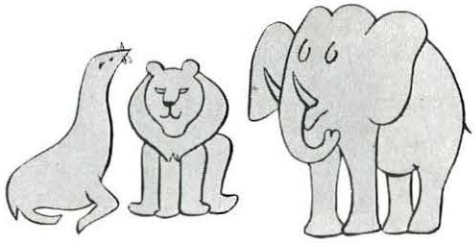
開園時間は９時半から５時までで、４時に切符売止めになります。

なきごえ　昭和55年11月15日発行（毎月１回15日発行）　第16巻第11号（通巻183号）
編　集／大阪市天王寺動物園
発行人／大阪市天王寺動物園協会　和田辰巳
印刷所／株式会社　松村善進堂　定価100円（送料共）
〒543 大阪市天王寺区玉水町２
電話　大阪（06）771－０２０１
振替口座　大阪　３７８２３
１年継続（12部）1,100円（送料共）



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



・医学実験用動物
・愛玩犬、猫直輸入
・宣伝用、テレビ用、貸動物
・教材用鳥獣剥製販売
・原色世界雑類図鑑（34種１枚もの）要郵便券150円・鳥獣価格表100円

有限会社　**吉　川　商　会**

本　社　神戸市生田区中山手通三丁目二八番地　電話（078）221-8195・221-1517
飼育場　神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地　電話（078）241-3494

自然の
おいしさ

全糖

●合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はいっさい含まれていません。

雪印ヨグール

パイン・オレンジ・ストロベリー・フルーツカクテル

各130c.c.＝90円

編集委員　板野　健一・中川　哲男・大野　尊信・榊原　安昭・樽本　勲・中川　道朗・高橋　真三・農本　武志
石島　宏胤・野口　秀高・宮下　実・橋本　一郎・長瀬健二郎・三浦　正明・葭谷　文彦・仲谷　登